

令和 3 年度文化事業の評価について（まとめ）

	令和 3 年度	(参考令和 2 年度)	(参考令和元年度)
文化施設事業数	163 件	126 件	235 件
文化施設事業参加者数	94,536 人	65,227 人	177,003 人
その他文化事業数	4 件	5 件	7 件
その他事業参加者数	15,519 人	1,783 人	65,707 人

※主にイベントやプログラムを事業数として計上。

■ 事業評価シートから

令和 3 年度をもって「奈良市文化振興計画」の計画期間が終了となる。文化施設等で実施したすべての事業について、評価シートの提出を求め、内容を確認した。

前年度と同様に新型コロナウイルス感染症の影響について言及するものが多かったが、令和 2 年度の成果や経験をうけて、企画を調整していることが多く、コロナ禍での事業展開について工夫を見て取ることができた。

■ 新型コロナウイルス感染症の影響について

前年度から続くコロナ禍により、事業を継続するために、定員の制限（北部会館市民文化ホールの子ども教室）や、有料化や参加費増額などを余儀なくされた事業（ならまちセンターのならまち篝火コンサート）もあり、その分参加者が減少するケースがみられた。事業主催者においても、参加者が減少するなかで、どのように効果を高めていくかを今後の課題としている。

一方で、コロナ禍をきっかけに会場や開催方法、協働相手などについて検討を重ねることでの成果もみられた（ならまちセンターのならまち落語会）。コロナ禍で開催の意義自体が問われるなかで、各事業の目的を再認識する機会になったといえる。

ICT の活用（オンライン化等）についても、施設整備面（ハード）においてはならまちセンター（ホール・会議室）の LAN 環境の整備など、前年度同様に進めている。事業についてもオンライン配信なども実施しているが、コロナ禍での一時的な対応として実施していた事業（北部会館市民文化ホール 高の原音楽芸術協会演奏会）は、今後通常の実施体制に戻っていくことが予見される。

文化事業のオンライン開催については、事業の双方向性が損なわれるなどの意見もある一方、公演をアーカイブ化できるなどの利点もあるため、これまでの成果や事業の性質を鑑みながら、コロナ禍の後も継続した ICT の活用を進めていく必要がある。

■ 全体を通じて

前年度に比較し、事業数も参加者数も増加傾向にあるが、コロナ以前（令和元年度）の水準までは戻っていない。

しかし、大学や小中高校との連携強化を図る事業（杉岡華邨書道美術館の奈良教育大学で学んだ書家群像）があり、若い世代を対象や協働者として意識した企画が増加傾向にある。第2次奈良市文化振興計画においては、推進施策 1-1 「文化に触れる機会が少ない人に対する鑑賞・活動機会の提供」のアウトプット指標に「子ども・親子向け文化イベントの参加者数」があり、新しい計画の推進という観点からも、今後継続して進めていきたい。

一方で、コロナ禍もあり、事業の継続に課題を抱える事業も増えてきている。文化施設事業においては、各施設の役割やあり方を見直しながら、事業内容も検討を重ねて、市民が気軽に文化に触れるための環境整備を進めていきたい。

<参考>

文化施設（10施設）入館者数推移（人）

H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
731,595	786,702	725,267	730,929	669,125	603,866	206,069	363,783